みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

European Images of Oceania : Cannibals and Christians : American Images of Oceanic Peoples in Newspaper Articles of the 19th Century

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 和芳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003505

第2章　西洋のオセアニア観

人食い人種とキリスト教徒

——19世紀アメリカの新聞に見るオセアニア人観——

中　山　和　芳*

はじめに
Ⅰ　19世紀のオセアニアと西洋
Ⅱ　ポリネシアに関する新聞記事
　1　肯定的な内容の記事
　2　否定的な内容の記事
Ⅲ　メラネシアに関する新聞記事
　1　肯定的な内容の記事
　2　否定的な内容の記事
Ⅳ　文明的なポリネシア人と野蛮なメラネシア人
おわりに

はじめに

本稿は，19世紀（正確には1790年から1870年）のアメリカの新聞においてオセアニアの人々がどのように記されていたかを紹介し，新聞記事からアメリカ人のオセアニア人観を検討することを目的としている。

本稿で用いる史料は，ウォード（G. Ward）の編集により1967年に刊行された *American Activities in the Central Pacific 1790–1870*（全8巻）である。この本は，アメリカで発行された新聞のなかから上記の期間に掲載されたオセアニア関係の記事を収集し，記事が扱っている地域名のアルファベット順に並べたものである。対象となった新聞は，大多数はマサチュセッツ州で発行されたものだが，ホノルル，サンフランシスコ，ニューヨーク，ワシントンなどで発行されたものも若干含まれている。

1930年代，太平洋を横断する商業航空路が開設されると，これまで顧みられることのなかった太平洋の小さな島々が脚光を浴びた。飛行機の燃料補給地や緊急避難地として必要となったからである。アメリカは，そうした目的に叶う島々を捜し，その島

* 東京外国語大学外国語学部

Key Words: American images of Oceanic people, civilization, savagery, Christians, cannibals
キーワード：アメリカのオセアニア人観，文明，野蛮，キリスト教徒，食人種

々に対する権利を主張しようとした。そこで，誰がその島々を発見したのか，どの国が領有権を持っているのかを調べることが必要となり，アメリカの船員達が太平洋の島々を訪れた記録を調べることになったのである。

1940年，アメリカ国務省の Central Pacific Islands Project 1790–1870 が始まり，新聞や航海日誌が調査された。この作業は1942年に終了したが，その後は飛行機の性能が増大したため，そうした島々の必要性もなくなって，調査結果はそのままになっていた。それを地理学者のウォードが編集して，1967年に刊行したのがこの本である。なお，航海日誌に関する調査結果は残っていなかったので，この本に載せられたのは新聞記事のみである。

I　19世紀のオセアニアと西洋

まず，19世紀のオセアニアと西洋との関係がどのようなものであったのかを，簡単に見ておくことにしよう。

太平洋に初めて船を乗り入れた西洋人はスペイン艦隊を率いたマゼランであり，それは1521年のことであった。その後，スペインは太平洋に新しい植民地を求めて多くの探検隊を派遣した。16世紀の太平洋は「スペインの湖」と呼ばれた。17世紀，スペイン人に代わって太平洋で活躍したのはオランダ人であった。

そして18世紀，太平洋探検を完成させたのはイギリスとフランスであった。なかでも1767年のウォリスによるタヒチ島の「発見」と，ジェームズ・クックの3回の探検航海（1768–71, 1772–75, 1776–79）が重要であった。タヒチ島には，1768年にフランスの探検家のブーゲンビルが訪れ，航海記にタヒチ島を高貴な野蛮人の住む文明に毒されていない理想郷と記した。これに触発されて，哲学者のディドロは，ヨーロッパ文明批判の書，『ブーゲンビル航海記補遺』を出版し，ヨーロッパにタヒチ（ポリネシア）＝楽園のイメージが広まった。

ジェームズ・クックは太平洋の最も偉大な探検家であった。彼は，オーストラリアやニュージーランドの海岸線を正確に海図に記し，南極の海域まで探索して伝説の南方大陸が存在しないことも確かめた。さらに，ニューカレドニアやハワイ諸島も「発見」し，太平洋のほとんどの島々が正しく地図の上に示されることになった。この航海には科学者や画家が同行し，博物学や民族学の研究にも大きな貢献を果たした。

クックの3回目の探検に参加した者にジョン・レドヤードというアメリカ人がいた。彼は，公式の航海記録の出版に先立って自分の航海記録を出版し，アメリカ北西

海岸のラッコ猟の経済的可能性を示唆した。ラッコの毛皮を中国に持って行けば，莫大な利益を得られたからである。1787年よりボストンの人々がラッコ猟を始め，ハワイ経由で中国に航行し，1790年ボストンに戻ってきた。この後，ハワイは北西海岸から中国へ毛皮を運ぶ全ての船の寄港地となり，北西海岸での毛皮交易は1825年まで続いた（Dodge 1965: 62）。

絹・茶・磁器といった中国の産物は欧米社会で盛んにもてはやされたのに，西洋には中国人が必要とする品物はあまりなかった。ラッコが乱獲により減少してくると，それに代わる品が必要となった。太平洋の島々は，中国人が欲しがる白檀・ナマコ・真珠などを産出した。

1804年にフィジーに白檀のあることがわかると，多くの船がやって来た。しかし1816年にはフィジーの白檀は採り尽くされた。その後，ハワイ（1811–28年），マルケサス（1813–17年），ニューカレドニアとニューヘブリデス（1820年代の終わり—1865年）という順に，新しい産地を発見しては乱獲するという過程を繰り返し，19世紀の半ばには太平洋中の白檀は消滅してしまった。白檀交易は太平洋の交易でもっとも暴力を伴うものであったという。太平洋のナマコの産地として有名なのはフィジーであったが，フィジーでのナマコ交易も，1810年代の開始から2度のピークを経て，50年代には停滞した。真珠の交易は1832年から1838年までツアモツを中心に行われた。

白檀やナマコ以上に19世紀の太平洋に大きな影響を与えたのは，主としてアメリカ人によって行われた捕鯨業であった。アメリカの東海岸では早くから沿岸捕鯨が営まれていたが，18世紀にはナンタケットなどを中心として大西洋での遠洋捕鯨が行われるようになった。1789年に捕鯨船は南米の先端のホーン岬を廻って初めて太平洋に入り，チリの沖合で操業した。太平洋捕鯨の開始である。他方，1788年にイギリスの植民地となったオーストラリアでも，周辺海域での捕鯨が始まった。1791年にシドニーに着いた囚人輸送船11隻のうち5隻は捕鯨船で，囚人を降ろすと直ちに鯨を追いかけたという（森田 1994: 72–74）。太平洋の捕鯨は，しばらくの間，北米・南米の沿岸地域とオーストラリアの東岸部に限られていたが，1820年頃に赤道地帯や日本沖に鯨の漁場が発見されると，太平洋一帯に捕鯨船が繰り出した。

捕鯨船は一度母港を出ると，数年は戻らずに鯨を追いかけ続けた。このため，食料・水・薪の補給や船員の休養の目的で，捕鯨船はしばしば島々に立ち寄った。1838年から42年にかけてアメリカによる最初の大規模な太平洋の科学探検を行ったウィルクスは太平洋上に15の鯨の漁場を記しているが，そのうち10の漁場はポリネシア内部またはその近くであった（Strauss 1963: 35）。それゆえ，捕鯨船はタヒチ・ハワイ・ニュー

ジーランドといったポリネシアの島々に頻繁に寄港したが，メラネシアの島々への寄港は少なかった（Campbell 1989: 64）。捕鯨船の乗組員には，長期間の洋上でのきびしい労働に嫌気がさし，南海でのきままな生活に憧れて，船から逃げ出して島での滞在を選ぶ者もいた。多くの船員が去ったために，人手が足りなくて出港出来ない船もでた。そのような場合，島での生活に飽きた船員や島民を雇い入れた。

鯨油は照明用燃料や蠟燭に用いられる大切な資源であった。太平洋での捕鯨は，1835年頃より1850年代にかけてが最盛期で，1860年代に入ると衰退していった。鯨の数が減少したことに加えて，1859年にアメリカのペンシルヴァニアで最初の油田が発掘されて石油が鯨油に取って変わっていったからである。

白檀や鯨が枯渇した後の太平洋地域は，ココヤシ・サトウキビなどの熱帯の農産物の産地として注目された。ヤシの成育には太平洋の島々は理想的な環境であり，手がかからず，乾燥させてコプラを作るのも簡単であった。ココヤシの油はマーガリン・石鹸・ダイナマイトなどの原料となった。サトウキビは，オーストラリアのクイーンズランド，フィジー，ハワイなどの地域で栽培された。

サトウキビの農園は大量の労働力を必要とした。このため，ハワイのサトウキビ耕作地には，1852年以降，中国・日本・フィリピンなどから労働者が移住した。フィジーには1879年からインド人労働者が導入された。

労働者には，オセアニアの人々も用いられた。1860年頃より，労働力徴収者が，メラネシアのソロモン諸島・ニューカレドニア・ロイヤルティ諸島などのまだ貨幣経済の影響を受けていない地域で安い労働力を集め，クイーンズランドやフィジーなどの農園主に供給した。数年間の契約労働者として雇われ，年季が明けると僅かな西洋の品物が与えられて故郷に送り帰されることになっていた。しかし，文字も読めず，賃金労働の意味も良くわからない人々を見知らぬ土地へ連れて行って働かすのであるから，多くの問題が生じた。誘拐まがいの方法で人々を無理やり駆り集めることも多かった。また，監督されて定められた時間働くという習慣を持たない人々には，異なる生活環境での過酷な労働で病死する者も少なくなかった。こうしたブラックバーディングと呼ばれた契約労働は，奴隷貿易と変わらないとして当初より宣教師達からは非難されたが，20世紀の初頭まで続いた。

このように，19世紀の太平洋では西洋人による経済活動が盛んに行われたが，宣教師による布教活動も精力的に行われた。太平洋諸島におけるキリスト教の歴史は，16～17世紀にスペイン人の探検隊に同行したカトリックの宣教師による伝道に始まるが，ミクロネシアのマリアナ諸島以外の地域ではなんの成果も挙げることが出来な

かった。本格的な布教活動は，1797年にプロテスタントのロンドン伝道協会の一団がタヒチ島に上陸して開始された。1819年にポマレ二世が改宗すると，タヒチでは改宗があいついだ。その後，ロンドン伝道協会はポリネシアの各地に活動を広げていった。アメリカのボストン宣教団も1820年よりハワイで布教活動を開始した。1930年代までにポリネシアの主要な島々の人々がキリスト教に改宗すると，その後，布教活動はメラネシアやミクロネシアへと広がった。

フランスのカトリック宣教団は，1827年のハワイを皮切りに，オセアニアでの布教に乗り出した。このため，プロテスタントとカトリックの両派の対立が各地で起こった。カトリック宣教団は，40年代にはフランス海軍の支援を受けて，それまでプロテスタントであったタヒチの人々をカトリックに変え，53年のフランスのニューカレドニア併合に際しても重要な役割を果たした。

プロテスタントとカトリックの布教活動の結果，19世紀の初めにはキリスト教についてはほとんど何も知らない異教徒だったオセアニアの人々は，世紀の終わり頃には多くの地域でキリスト教徒となっていたのである。

西洋諸国は19世紀の前半までは太平洋地域に領土的関心をあまり持たなかった。島々は小さく，経済的価値もあまりなかったからである。それでも，イギリスが1788年からオーストラリアの植民を開始し，1840年にニュージーランドを領有した。フランスも，1842年以降，タヒチ・ツアモツ・マルケサスなどの東ポリネシアの島々を獲得し，1853年にメラネシアのニューカレドニアを領有した。オランダも1828年にニューギニア島西部を併合した。

島々の戦略的価値が認識されるようになった19世紀後半の太平洋は，西洋列強による植民地争奪の舞台となった。イギリスは，フィジー（1874年）・ニューギニア東南部（1884年）を併合し，トンガを保護領（1900年）とし，ニューヘブリデスについては1906年からフランスと共同統治を行った。ドイツは，ニューギニア北東部(1884年)・ミクロネシアのマーシャル諸島（1885年）を保護領とし，1899年には米西戦争に敗れたスペインからマリアナ（グアムを除く）とカロリンの両諸島を買収した。最も遅れて太平洋の分割争いに加わったアメリカも，1898年にハワイを併合し，同年に米西戦争で占領したグアムをフィリピンと共に領有した。長い間，イギリス・ドイツ・アメリカの3カ国で利権が争われてきたサモア諸島も，1899年にアメリカとドイツが東西に分割してそれぞれを領有した。こうして，オランダ領となった西ニューギニアとチリ領となったイースター島を除く太平洋の全域は，19世紀の末までに英仏独米の4カ国の間で分割されることになった。

Ⅱ　ポリネシアに関する新聞記事

ここで，新聞記事を紹介することにするが，ウォードの本のなかで見出しとされている地名は，ミクロネシアといった広域を示すものから小さな無人島の名前まで様々である。ここでは，オセアニアの人々に言及している記事を取り出し，それらを地域別に並べ換えて，ポリネシアとメラネシアについて示す（ミクロネシアは紙幅の都合で本稿では省略する）。さらに，比較の便を図るために，肯定的な内容の記事と否定的な内容の記事に分けて示す。なお，オセアニアの人々を示す言葉のうち，aborigine を「土着民」，native を「原住民」，inhabitant を「住民」，savage を「野蛮人」と訳すことにする。また，新聞記事の出典については巻数と頁数のみを示すことにする。

1　肯定的な内容の記事

ソサエティ諸島

1816年　モオレア島でキリスト教の布教が進展。大多数の人々が偶像を放棄し，宣教師は彼らの神々を焼き払った。首長たちは聖域を破壊し，壊した祭壇を燃やして料理した。600人以上の人々（主として成人）が宣教師の開いた学校で学ぶ（4・635）。

1817年　ソサエティ諸島では，数年前，数か月前まで残酷な異教徒だった土着民が今やキリスト教徒である。あまりにもすばらしい変化だ（6・410–411）。

1819年　この諸島のすべてがキリスト教徒であると表明している。盗みは見られない。家庭での祈りはどの家でも行われている（7・5）。教育のない野蛮人が，以前見たことのない真剣さと厳かさのなかで賛美歌を歌っているのを見て驚く（7・7）。

1823年　フアヒネ島ではキリスト教が広まり，人々は驚くほど道徳的で，文明が急速に進展。偶像の寺院は破壊され，その廃墟の上にエホバの寺院が建つ（3・321）。

1824年　住民は既にイギリス風の衣服を着用するが，便利な家屋を建ててヨーロッパ風の家具を備えることも始めた（5・364）。現在はクック船長の来航時とはまったく異なる。宣教師が住民の道徳や慣習を完全に変えた。偶像崇拝はもはや存在せず，キリスト教を受け入れている（5・370）。この群島の幸福な原住民はより文明化した人々の悪徳や愚行から今のところ免れている。以前は西洋の航海者によって悪に染まっていたが，現在はキリスト教の影響で，ソサエティ諸島の住民はいかなる文明社会も真似ることを恥じる必要のないモデルを示す。クック船長には盗人の汚名を着せられたが，野蛮人の間で頻繁に見られる盗みは，ここではほとんど見られない。住民はとても友好的で外国人に親切で，文明の高い段階に達しているように見える（6・412–416）。女性達は慎み深く行動し，以前のよう

な交際はほとんど望めない。ほとんど全ての住民は読み書きができる（7・8）。フアヒネ島では，原住民の間ですべてのこと――垣根，漆喰の家，行儀作法，とりわけ衣服――が偉大な進歩を遂げている（5・365）。ライアテア島では文明が大きく進展した。かつて木が生い茂っていた所に美しい村が出来て，村の中央には教会や宣教師の家がある（5・366–367）。

1825年　タヒチ島では製糖工場が操業しており，モオレア島でも綿の製造工場が完成した。野蛮人と教化された人のどちらが幸福かという問題に解答が示されないまま，文明の利点と害悪とがこれらの遠方の地方にまで次第に広がりつつある（4・644）。モオレア島では原住民が予想以上に文明化している。何人かは聖書を読める。教会には4～500人の原住民が集まり，皆きちんとした服装をしている（4・638）。捕鯨船に乗り組んでいるタヒチの原住民は素直で正直である（7・13）。

1827年　ロンドン伝道協会のタヒチ支部の年会に6000人の原住民が出席したが，そのうち1000人が信者であった。傑出した戦士であった2人の原住民が，罪を告白しキリストにのみ救いを求めて死亡した（2・215）。

1849年　原住民はすべてキリスト教徒だと表明。宗教の教えも守る（6・442）。

1853年　フアヒネ島では，キリスト教の伝来が状況を一変させた。言語は宣教師によって文字化され，学校や教会が建てられた。恐ろしいアリオイ結社[1]も廃止された。島民達は快活で愛想がよく，音楽と社交を好む（3・336）。

1858年　原住民は友好的で素直で柔順である。彼らはキリスト教徒となって白人の文明を享受したいと望んでいる（6・457）。

マルケサス諸島

1795年　クックの探検に同行したフォルスターの文章の引用。「これらの島の住民は，全体的に言って例外なく，この海域の人々の中でもっともすばらしい民族である。姿形の良さと整った顔だちはすべての民族にまさるだろう」（4・206）。

1814年　アメリカの軍艦エセックス号のデイビット・ポーター艦長は1813年にヌクヒヴァ島に寄港し，アメリカ合衆国の名前で島を占有した。港の近くの原住民達はアメリカの軍艦を友好的に迎え，多くの補給品を供給した。寄港中に敵対的な部族と衝突したが服従させた（5・223–224）。

1826年　ヌクヒヴァ島に寄港したアメリカ船ドルフィン号に対して，原住民は友好的であった（4・224）。

1833年　ヌクヒヴァ島では人々はどこでも友好的だった。港から4マイル離れたタオイアという渓谷でも，人々は福音を受け入れようとしており，多くの異教の偶像は放棄され腐りかけていた（4・234–235）。

1860年　日曜日，ヒヴァオア島のプアマオの教会には30人程――ほとんどが女性――が礼拝に出席。多くの者は教会のまわりをぶらついたり，ドアから覗き込んでいた。もっと大きくて広い建物であれば，もっと多くの人が出席しただろう（4・307）。

1861年　教会に関しては，昨年よりもよい状況にある。人々はハワイ人伝道師の話をよく聞き，男の子達は学校に通い，読み書きできる者も増えている（4・316）。

ハワイ諸島

1802年　ある船長が，この島々の原住民は，定住する白人の職人の助けで，クック船長の時代から見るとすばらしい進歩を遂げたと語った（3・123）。

1813年　しばしばアメリカの北西海岸にやって来るハワイ諸島民は，驚くほど勤勉で状況の改善に熱心である。ハワイの人々は「自然」から飛び出したばかりだが，寄港する船からさまざまな西洋の品を手に入れている。白人の指導の下に，住民の多くは勇敢で強壮で経験豊かな船員となっている（3・125–127）。

1821年　オアフ島の白人宣教師の家族は原住民から親切にされている（5・279）。

1845年　ラハイナ島で座礁したアメリカの捕鯨船ドゥリモ号の救援に原住民も加わった（4・352）。

1847年　モロカイ島では，宣教師の影響で，子供達は良い洋服を身に着け，土地も良く耕されている（4・621）。

1859年　ハワイのカナカ人は労働者として最適で，おとなしく，仕事にもよく耐えている（3・391）。座礁して沈没したアメリカ船 J. B. ランカスター号の乗組員は，モロカイ島の原住民に親切にもてなされた（4・623–624）。

サモア諸島

1835年　サヴァイイ島は食料も豊富で，捕鯨船にとって太平洋で一番良い港である。首長を船上に人質にとっておけば，原住民からいかなる危害も受ける心配はない。原住民はとても礼儀正しく，盗みを働こうとしない（6・401）。

1842年　ツツイラ島では，昨年だけで500人の原住民が改宗した（7・325）。

1854年　サモア諸島の人口は3万3901人である。1830年にこの諸島に初めて宣教師が入ったが，現在では200人程を除く全員がキリスト教徒であると表明している。諸島には177の教会がある（6・364）。

1860年　ウポル島のアピア港は太平洋で最高の港のひとつである。この港には，過去25年にわたって捕鯨船が水や補給品を手に入れるために頻繁に立ち寄っているが，商船がこの港を利用するようになったのは最近のことだ（7・393）。

1866年　太平洋の島々を訪れる船が船員の脱走で出航出来なくなるのは良く知られているが，アピアでは船員の脱走は稀である。こうしたことが起きても，原住民は賞金目当てに脱走船員を捕らえてくるから，船長が困難な目に会うことは少ない。船が必要とする薪・水・その他の物も豊富に手に入れることが出来る（7・398）。

トンガ諸島

1797年　2隻のフランスの探検船は原住民に親切にもてなされた（7・280）。

1824年　1822年にはウェズレイ派伝道協会が布教を開始した。宣教師は原住民に友好的に迎えられ，パラウと言う名前の首長に庇護された（5・361）。

1825年　原住民の肌の色はハワイの島民に似ていて，体には何枚かの葉しか身につけていない。彼らは，友好的で快活で陽気であるように見える（4・639）。

1840年　ヌクアロファは重要なキリスト教徒の町で，宣教師が住んでいる。島の人口は5000人で，そのうち1000人がキリスト教徒である。ハアパイ諸島の人口は4～5000人だが，3/4はキリスト教徒である（6・285-286）。トンガタプ島から85マイル離れたアタ島では，ほとんどの南海の島民が行う盗みをしない。彼らはいかなる道徳的な教え［キリスト教］も受けていないので，これは特筆に値する（1・157-162）。

1841年　座礁した捕鯨船シャイロック号の乗組員がボートでトンガに到着。最近宣教師が行った好意のお礼として，原住民は乗組員を親切にもてなした（7・450-451）。

1856年　トンガの王は近隣の人々の誰よりも文明的に進んでいる。彼がシドニーを訪れて以来，宮廷でヨーロッパの方式が多く用いられている（6・370）。

1876年　出版されたばかりのイギリスのバジリスク号のジョン・モレスビー船長の航海記の紹介記事。「タファヒ島は，アポロのようにしなやかで力強い男達と身長が高く肉体の完全性の理想を示す女達が住む，まさにエデンの園である。高潔な顔立ちで，褐色の肌はサテンのように柔らかく，黒い瞳は表情豊かである」（5・84）。

以下の島々に関しては，かいつまんで述べる。

ツアモツ諸島に関しては，1824年に「アナア島では，キリスト教が広く受け入れられ，あらゆる地区に真実の神を礼拝する場所が設けられ，食人と戦争は完全に終息し，今はすべて平和である」（5・364-365）との記事があり，1838年に「原住民は野蛮でひどい状態にあり人食い人種であったマンガレヴァ島で，1834年に布教を始めたカトリックの宣教師はすぐに受け入れられた」（4・137）との記事がある。

オーストラル諸島に関しては，1822年に「日曜日，多くの原住民が教会に向かう感動的で喜ばしい光景を見た。人々は静かにきちんと行動した。彼らのすべての神々は破壊され，聖域から運び去られて教会の椅子として使われている」（6・226-227）との記事があり，1823年に「1821年にキリスト教が伝えられた。人々の礼儀正しい服装と，教会での礼儀正しい行動に驚いた」（6・320-321）との記事があり，1826年に「座礁したアメリカの捕鯨船ファルコン号の船員は親切にもてなされ，粗野な島民はどんな小さな物も盗まなかった」（6・327）との記事がある。

クック諸島については，以下のような記事がある。1827年に「ラロトンガ島のすべての人々がキリストの教えを受け入れ，以前頻繁に行われていた食人や嬰児殺害は終息した。アイツタキ島のすべての住民もキリスト教を受け入れている」（1・217）とあり，1832年に「マンガイア島にクック船長以来初めて寄航したランブラー号に原住民は友好的。原住民は他の島々の住民よりも黒い肌だが，同じような顔だち」（4・119）との記事がある。1836年に「船が座礁してボートでアイツタキ島に漂着したインデペンデンス号の乗組員に，首長は『10年前だったら，我々はあなたがた全員を殺して神に捧げ，おそらく食べていただ

ろう。今や我々はキリスト教を信仰しているから，あなたがたは安全である』と言った」（6・498）との記事がある。1837年には，「ラロトンガ島に教会が建てられて8年になる。もはや戦争はなく，武器は脇に置かれたまま」（6・259）と，「ラロトンガ島の住民は1823年にはすべて異教徒だったが，1834年にはすべてキリスト教徒だと表明」（6・261）との記事がある。1845年には，「ラロトンガ島で座礁した捕鯨船タキトゥス号の荷物を陸に運び出すのを，島民は進んで手伝った。略奪する機会が沢山あったにも拘らず，いささかも盗もうとしない」（6・265）と，「ラロトンガ島の原住民は文明化している。3人のイギリス人の宣教師の指導の下で，法規によって道徳が守られ，原住民の当局者によって秩序が厳しく保たれている」（6・273）との記事がある。1853年の記事には，「マンガイア島で座礁したアメリカの捕鯨船フランシス号は島民の協力を得て荷物を陸に運んだが，誠実な島民は何1つ盗まなかった。この事実からも，この島で布教が成功していることが分かる」（4・126–129）とある。1861年には，「ラロトンガ島で教会に向かう人々は，文明化したニューイングランドの人々と同じようだが，彼ら野蛮人の群衆は，服装では『アダムとイブの古き良き時代』の流儀を守っている」（6・303）と，「マニヒキ，ラカハンガ島の人々は，マルケサス島の人々と違って，非常に穏やかで悪気のない人種である。マニヒキ，ラカハンガ島ではラロトンガ島出身のキリスト教の教師が無限の影響力を発揮している。何人かの年寄り以外は皆文字を読める」（4・514）という記事がある。そして1869年の記事には，「ラカハンガ島にボートで漂着したロマ号の乗組員は原住民に友好的に迎えられた」（6・232）と記されている。

ニウエ島に関しては，船を降りてニウエ島に留まったアメリカの捕鯨船船員が野蛮人に食べられたという噂があったようだが，1840年には「そうした証拠はない」（5・170–174）という記事が載っている。

イースター島については，1812年の「捕鯨船に乗り組みイギリスに行ったことのある王の息子が洗礼を受けたが，ハンサムで素直な彼が人々を文明化させるかもしれない」（2・230）と，1822年の「来航したフォスター号は原住民に丁寧に応対された」（2・231）との記事がある。

ツヴァルに関しては，1822年の「寄航したアメリカ船インデペンデンス号が原住民に親切に迎えられた」（5・257）という記事と，1866年の「島々では偶像が破壊され，キリスト教の教師が派遣されるのを待っている」（5・263–264）という記事がある。

ウォリスについては，1832年に「原住民は友好的で温和な性格。他人の品物を勝手に使う傾向があるが，それをまったく無邪気に行う」（4・119）との記事がある。

ロトゥマ島については，1825年に「原住民は驚くほど清潔・快活・友好的。ハワイ島民より肌が白い。腰に巻きつける草の葉を除くと裸」（4・640）との記事がある。

2　否定的な内容の記事

ソサエティ諸島

1817年　タヒチ島では戦争が島を荒涼とし貧困にさせている。彼らの戦争は略奪という形で行われ，焼き払い・略奪するが，ごく少数の人命が奪われるだけである（6・409–410）。タヒチ島で，敵対する者がキリスト教徒を攻撃したが，ポマレが最高権力者となって，反乱の動きは鎮静した（7・3）。

1836年　ソサエティ諸島の島の1つでボストンのホンジュラス号が野蛮人に襲撃され，1人の少年を除くすべての船員が殺害されたと伝えられている（6・430）。

1844年　タヒチ島でフランス兵が島の女性を無理やり連れて行こうとして，原住民と衝突し，双方に死者を出した（7・55–57）。

1845年　タヒチ島でフランス人と原住民の間で戦闘があり，フランス側に400人，原住民側に約80人の死者を出した（7・68）。

1846年　フアヒネ島に居住する2人のフランス人は，彼らの犯した何らかの罪に対する報復で原住民に殺害された。タヒチ島から軍隊が派遣されたが，原住民の反撃で30人の死者を出して退却した（6・437）。

1847年　島々は興奮状態にあり，フアヒネ島では戦争が生じて多くの血が流れた。多くのフランス兵が死傷したが，詳細はまだわからない（3・323）。

1852年　フアヒネ島では革命が起こりそうな気配である。原住民はポマレ女王の権威を否定し，王を選出した（3・332）。

マルケサス諸島

1795年　タフアタ島のヴァイトフ湾の住民は，自分たちは食人をしないが，他の島々の島民やタフアタ島の内陸部の人々は人間の肉を貪り食う，と言う（4・213）。

1817年　島の人食い人種が寄港したアメリカ船マリー号の2人の船員を殺して食べた（4・221）。ウアポウ島で，白檀交易船マチルダ号は錨を切られて座礁した。人食い人種の原住民達はすべての船員を殺そうと計画した。首長は，船長と親しかったので船員達の殺害に反対し，船員を殺すのなら自分と自分の息子を殺してからにせよと言った。このような度量の大きさは開明化されていない野蛮人の心にも驚きと賞賛の念を引き起こした。首長を殺すことなど出来なかったので，船員達の命は助かった。ヌクヒヴァ島の原住民は人食い人種である。タイピー族と呼ばれる反乱軍が君臨する首長に戦争をしかけ，6人を殺して食べた（7・340–342）。

1818年　原住民がアメリカ船フライイング・フィッシュ号の2人の船員を殺害した（4・222）。

1833年　ファツヒヴァ島ではこの数か月で13人が供犠され，最後の1人は1月前に焼かれて食べられたと，布教にあたっているタヒチ島民伝道師が言った（4・232）。

1837年　バークレー号の船長が捕えられたが，品物と交換で救出された（7・454）。

1843年　フランス人の知事と数人の部下は奥地で任務を遂行中，原住民に殺された（4・244）。住民は姿形の良さと肌の色の白さで際立っているが，広く行われている刺青で醜い。彼らは人食い人種と呼ばれる文明の段階にあり，首長達は敵を食べる楽しみのために戦争を行う（4・245–246）。ファツヒヴァ島で，アメリカの捕鯨船の船員が上陸しようとして襲撃され，1人が死亡した（4・247）。

1845年　太平洋に点在する多くの島々は，野蛮性を脱してキリスト教を受け入れ，今や地上の王国として認められることを求めている。しかし，依然として獰猛な野蛮人が自由に動き回っていて，宣教師も足を踏み入れておらず，土地の名前以外はほとんど知られていない所も多い。そうした島々のなかにマルケサス諸島も入る（4・261）。ヒヴァオア島で座礁した捕鯨船パナマ号を原住民が略奪した（3・220–221）。

1848年　捕鯨船ヘンリー号をヒヴァオア島の原住民が略奪した（3・224）。

1849年　アメリカの捕鯨船ジョージ・アンド・スーザン号のボートがエイアオ島に漂着。原住民は，ボートを取り上げたが，船員達に食べ物を与えた（2・261）。

1853年　ヒヴァオア島でイギリスの交易船マグダレーナ号の船長が，交易している時に原住民に撃たれて死亡した（3・233）。

1857年　マルケサス諸島の原住民は，樹皮布を腰に巻きつけているだけで，全身に美しい刺青をしている。ここは食人列島とでも言うべき所で，いくつかの島では機会があれば人々を食べている。食べられた白人の頭蓋骨をいくつも見た（4・287）。

1859年　原住民はお互いに戦争をしている。捕虜の1人が犠牲として食べられた（4・302）。戦争・口論・殺人・食人が依然として行われているが，布教にあたっているアメリカ人宣教師達はすべての階層の原住民に尊敬されている。ヒヴァオア島では，数年間ここで暮らしていたアメリカ人が口論の結果，原住民に撃ち殺された（3・246）。ヒヴァオア島で，座礁したアメリカの捕鯨船トワイライト号を原住民が略奪した。原住民は鉄を得るために船を焼き払うことを計画し，抵抗すれば全員を殺して食べてしまうぞと脅した。島にいた宣教師のビックネルが原住民の行動を抑えた。ファツヒヴァ島でも野蛮な状況が存在する。偵察に出た戦士達は2人の男と2人の女の頭を持ち帰り，3才位の女の子も連れてきた。老婆がその子供を聖地に連れて来て仰向けに寝かし，歯で頬の肉を食いちぎった。男達がその子供を木に吊すと，子供はすぐに死んだ，という話を聞いた。このような残酷さは決して珍しくない（3・234–238）。

1860年　昨年ヒヴァオア島で，島民同志の争いがあり，ヘテアニという地域の原住民はタイピーの村を襲って6人を殺した。死者の1人を持ち帰り，ハワイ人伝道師の目の前で料理して食べた。さらに捕虜にした1人の少年を焼き殺した（4・307）。

ハワイ諸島

1819年　宣教師がまだ来島していないので，王と臣下は依然として偶像と迷信の深い闇の中にいる（3・131）。

1835年　オアフ島では，数年前の船長殺害で，1834年にイギリス軍艦が2人の原住民を絞首刑にしてから，外国人に対する態度が悪化している。船員の1人が2ドルの負債を払わなかったので，原住民が船長を拘束した（6・401）。

1853年　ハワイ国王はアメリカへの主権の譲渡を考えているが，アメリカはハワイの独立を望んでいる。ハワイ諸島の住民はアメリカの一部を構成するのに充分には文明化されていないし，自治政府を保持するのに充分には開明化していない（4・77）。

1870年　ホノルルの原住民の生活様式は非常に単純で実に未開である。ナイフ・フォーク・スプーンは使用されていない（4・561）。

サモア諸島

1835年　サヴァイイ島で，原住民の財産を勝手に取ったのが原因でアメリカの捕鯨船ウィリアム・ペン号の船員2人が殺害された（6・392–397）。

1842年　サモア諸島の島で，以前アメリカ人を殺害した首長を引き渡すように言ったが断られたので，上陸して村を焼き払った（6・343）。

1849年　ウポル島では，キリスト教の布教の進展は愚かしくも邪悪な内戦によって妨げられている（7・365）。

1851年　原住民は現在そして過去4年間お互いに戦闘を続けてきた（6・354）。ウポル島で座礁した船の品物が原住民に奪われた（7・371）。

1854年　ウポル島における現在の大きな問題は，原住民の怠惰と政府がきちんと組織されていないことである（6・366）。

1856年　サモア諸島の原住民は非常に未開な生活をしている。異なる島の住民の間では絶えず戦争が行われている（6・370）。

1873年　この諸島の原住民は依然として戦闘を続けている（6・379）。

トンガ諸島

1805年　トンガタブ島で，原住民がアメリカ船ポートランド号を襲撃し，乗組員は1人を除き全員が死亡した模様である。この情報を伝えるアメリカ船も襲撃され，ボートに乗っていた乗組員が死亡した（7・306）。

1806年　トンガタブ島で，1802年にアメリカ船ユニオン号が原住民に襲撃され，船長を含む7人が殺された（7・311）。

1823年　ノムカ諸島の無人島で座礁した捕鯨船ロンドン号の乗組員8人が原住民の襲撃で死亡した。残りの乗組員はボートで脱出して他の島に移り，宣教団の船に救助された（7・322）。

1824年　トンガでは1797年に9人のロンドン伝道協会の宣教師によってキリスト教の布教が始まった。このうち3人は，内戦とオーストラリアのニューサウスウェールズから脱走して来た悪漢に扇動された残忍な性格の何人かの島民により犠牲となった。残った宣教師のうち5人は1800年に，最後の1人も1801年に島を去った。1806年に寄港した船を原住民が襲撃し，26人の船員が虐殺された（5・361）。

1835年　コリンシアン号がエウア島に寄航して食料を調達したところ，野蛮な首長は船長等を人質に取って法外な要求をした。要求通りに様々な物を与えて，やっと釈放された。粗野な野蛮人は信用できない（2・293–296）。

1840年　異教徒が宣教師の家を襲撃しようとしたので，宣教師はキリスト教徒の原住民のところへ逃れた。この時入港したイギリス船の船長が，異教徒と原住民キリスト教徒の間を調停しようとしたが成功せず，威嚇のため異教徒に数発発砲した。異教徒側も発砲し，船長と2人の高級船員が死亡し，19人が負傷した。イギリス船は宣教師の家族を乗せて，隣の島に連れて行った（7・295–296）。

1854年　ヴァヴァウ島で，アメリカの捕鯨船サリー・アン号が座礁した。乗組員がボートで島に上陸すると，原住民が船の品々を略奪した。王の息子とイギリス人の宣教師が船に来て，盗みを止めさせた（7・469–470）。

以下の島々については，かいつまんで述べる。

ツアモツ諸島については，1796年に「ヌクタヴァケ島の原住民は，1793年に寄港したアメリカ船を襲撃し，残酷にも1人を除く全員の乗組員を虐殺した。生きのびた者は奴隷とされたが，13カ月後に救出された」（6・210）とあり，1847年に「ラロイア島でフランスの船を原住民が襲撃し，船長と乗組員を虐殺した。フランスの軍艦が急行し，原住民をタヒチに連行して裁判を行い，6人に死刑の判決を下した。裁判では，事件の関与を全員が認めたが，船長が先に発砲して何人かを殺したとして情状酌量を求めた。この船長は，原住民に敵意を持っていることで評判だった」（6・255）とある。1857年には「テマタンギ島で2隻の難破船が発見され，原住民に乗組員を食べた嫌疑がかけられている。難破船に乗っていた2人の子供のものと思われる頭蓋骨が祭祀場で発見された」（7・258–264）という記事がある。

クック諸島については，1827年に「ラカハンガ島で原住民が寄航したアメリカ船ガンジス号から手斧を盗む。銃を向けると，原住民たちは驚くような早さで逃げ去る」（4・141–142）とある。1828年に「ペンリン島に寄港しようとしたペルビアン号に，大柄で凶暴な顔つきで槍と棍棒で武装した原住民がカヌーでやって来た。原住民の行動が敵対的に見えたので船は出港した。この島には強壮で野蛮な人々が住んでいる」（5・495–496）との記事がある。1841年には「ペンリン島に寄航したポーポス号を原住民が直ちに襲撃した。頭上に銃を放って退散させた。原住民はひどく野蛮で狂気じみたしぐさをした。攻撃に備えることなくこの島に近づくのは危険」（5・501）との記事がある。さらに1853年の記事には「座礁したチャタム号の乗組員がボートでペンリン島に上陸すると，原住民は品物を略奪した。原住民は，傲慢で怠惰で，偶像や祖先の霊を崇拝し，人食い人種だと言われている」（5・507–511）とある。

トケラウについては，1838年に「イギリスの捕鯨船に原住民のカヌーの大群が押し寄せて来たので，止むを得ず発砲した。王が撃たれて死亡し，数隻のカヌーが沈められると，

原住民は退却した。襲撃の原因は，乗組員が樹皮布の巻かれた神聖な木を切り倒したためと思われる」(5・269–270) という記事がある。

ニウエ島については，1840年に「原住民の黒い銅色の顔は獰猛である。他の島々では少なくとも僅かのものを身に纏っているが，ここでは何も着けていない人もいる。この島より堕落した野蛮な社会はあるまい」(5・176–182) とあり，1852年には「座礁したイギリス船レジェーデ・メイン号の乗組員が筏を作ってニウエまで来ると，原住民は品物を盗んで4人を島に連れ去った」(5・184) という記事がある。

イースター島に関しては，1817年の記事が「ロシアの探検家コツェブーは，原住民はフランスの探検家ペルーズが書いているほど親切でないが，おそらくペルーズの来航後にヨーロッパ人に不信感を抱く事件が生じたためと思われる，と書いている」(7・268) と紹介し，1822年の記事が「原住民は2つの集団に分かれ，しばしば両者の間で戦争が起こる。その時には捕らえられた者は皆殺される」(2・231) と述べ，1831年の記事では「原住民がボートから品物を盗んだので，威嚇のため発砲すると，首長が死亡した」(2・232–237) とあり，1856年の記事では「島民は盗癖があり欺瞞的で，以前にも問題を起こした。しかし，数年前にアメリカ船が住民の何人かを力づくで連れ去っており，『無知な野蛮人』よりも『白人』に非がある」(2・239–240) としている。

ニュージーランドについては，1824年の「西洋人から入手した銃で，原住民の部族どうしでの戦闘的・敵対的な精神が高まっている」(5・357) との記事，1839年の「チャタム島で，フランスの捕鯨船が原住民に襲撃され，乗組員全員が死亡」(1・94) との記事，1846年の「難破したファルコ号を，島に住む西洋人と原住民が襲撃し略奪した」(5・121) という記事がある。

ツヴァルについては，1826年に「暗褐色の肌で，背が高くがっしりした原住民は，葉から作った物や樹皮布で腰を覆っている以外は裸であった。彼らの行動は凶暴で野蛮に見え，手の届くものは何でも盗もうとした」(5・208) とあり，1865年に「漂着した船員が捕らえられ，洋服を取り上げられた。原住民と同じ生活をさせられ，耳に穴も開けられたが，危害は加えなかった」(5・261–262) という記事がある。

ウォリス・フトゥナに関しては，1833年に「ウヴェア島で捕鯨船オルダム号の船員が殺害された」(7・401) とあり，1837年に「ウヴェア島に派遣された島民伝道師らがすべて，野蛮で残忍な方法で殺害された」(7・402–403) とある。1855年には「フトゥナ島の住民は黒い肌で，ポリネシアのどこよりも凶暴で野蛮と言われている。ごく最近まで食人種であり，これまで見たなかで最も恐ろしくみすぼらしい。王は粗野な顔つきで，服装は古いフランネルのシャツとパナマ帽だけであった」(2・567) とある。

ロトゥマ島については，1845年に「原住民は野蛮人で仲間うちで戦争をする」(6・318) という記事がある。

Ⅲ　メラネシアに関する新聞記事

1　肯定的な内容の記事

メラネシア全般に関して，1859年に宣教師が書いた以下のような記事がある。

ニューヘブリデス・ソロモン諸島・ニューアイルランド・ルイジアード諸島などの原住民はとても野蛮だと考えられている。しかし，これらの島々に武器も持たずに上陸したが，とても親切に迎えられた。彼らを親切に扱うことが，彼らの友好を確実なものにするために必要である（4・381）。

フィジー

1855年　バウ島の首長とレワの王が，フィジー王のザコムバウを訪れたトンガ王の一行を攻撃した。トンガ王の部隊は戦闘に勝利し，敵対的な異教徒の首長達は死亡し，生き残った者達もおとなしくなった。人々は今や自由となって何千人もがキリスト教を受け入れている（2・467-468）。

1871年　座礁したヨットの乗組員がボートでレブカに無事到着した。30年前だったら，彼らは全員殺されて，食べられていただろう（2・509）。

ニューカレドニア

1854年　ニューカレドニア人はすばらしく知的な民族で，身体の特徴はフィジー人と似ているが，宗教や言語ではフィジーとはまったく異なる（5・70）。

1865年　ロイヤルティ諸島のリフ島ではロンドン伝道協会のマクファーレン宣教師が原住民のキリスト教学校を作り，2000人の子供が学んでいる。彼は教会も建設し，1500人の改宗者からなる原住民の信徒集団を作りあげた（4・30）。

ソロモン諸島

1862年　座礁した捕鯨船のボートがサンクリストバル島に辿り着いたが，船員達は原住民から出来る限りの親切を受けた（3・353）。

ニューギニアとその周辺

1876年　以下はすべて前述のジョン・モレスビー船長の航海記の紹介記事。ポート・モレスビー周辺の原住民は，トーレス海峡の人々（背が高く・筋肉質・おそろしい容貌・裸で色の黒いパプア人）とはまったく違う。彼らは，ずっとマレー人に似ていて，背が低く，肌が銅色の人々で，はっきりした目鼻立ちをした愛敬のある顔付きをしている。まったく武器を持たずに，歓迎してくれた（5・88）。ダントゥルカストー諸島の住民は友好的で話好きである（5・101）。

2　否定的な内容の記事

メラネシア全般に関して，1861年に宣教師が書いた以下のような記事がある。

タヒチ人・サモア人・トンガ人・フィジー人は次々と信仰を受け入れていったが，ソロモン諸島やニューギニアの野蛮な住民は信仰を受け入れていない（4・509）。

フィジー

1797年　寄港したスノー・アーサー号は原住民の襲撃を受けたが，銃で野蛮人を撃退した。原住民はとても恰幅が良く，6フィート以下の身長の者はいないようだった。彼らは銅色の肌をし，髪はもじゃもじゃであった（2・359–360）。

1800年　住民はトンガ諸島の島民よりも凶暴だと言われている（2・367）。

1828年　ヴァトア島で座礁したアメリカの捕鯨船オエノ号の乗組員は原住民に暖かく迎えられたが，2週間後にやって来た隣の島の原住民（インディアン達）[2] は，白人が武器を持っていないのを見て，1人を除く全員を殺害した。ただし，フィジーの首都のアンバウの原住民は友好的である（7・430–434）。

1832年　グライド号が1830年にオヴァラウ島に寄港中，上陸した船員が原住民に襲撃され2名が死亡した（7・421）。

1834年　セイラムのチャールス・ドゲット号の乗組員と原住民が一緒に島でナマコの調達にあたっていたところ，これらの原住民が突然襲撃し，5人の乗組人と4人の島に在住する外国人を殺害した。2週間後に船が再び戻ると，原住民は遺体を持ってきた（2・379–380）。

1835年　フランスの船が原住民に襲撃され，船長と航海士達が殺された（2・381）。

1836年　野蛮人達が寄航したアメリカの捕鯨船アワションクス号を襲い，船長を含む6人が殺された[3]。フィジー島民は太平洋で最も油断できないと言われている。彼らは白人を容赦なく攻撃して食べることを好む。彼らは山地のインディアンと低地のインディアンに分かれ，常に争っている。フィジーに関するすべての情報は，彼らが非人間的行為を行うことを示している（2・386–390）。

1837年　イギリスの宣教団の船のアクティブ号が座礁し，数人が原住民に殺された（2・394）。

1838年　長年この地域で亀甲やナマコの交易をしている人々は，フィジーの原住民は凶暴で好戦的な民族だと言っている（6・70）。

1839年　シドニーの交易船ディビット・オグリー号が原住民に襲撃され，2名が死亡，多数の乗組員が負傷した（2・400）。

1841年　ウェズレイ派の宣教師の家族の命が野蛮人によって脅かされているが，宣教師は老人の王が保護を約束しているからと言って残留する（2・410）。捕鯨船シャイロック号がフィジーの近海で座礁したが，ボートに乗り移った船長たちは，原住民の敵対的な気

質のためフィジーには行かずにトンガに向かった（7・450）。

1844年　ガムビア号のボートが原住民に襲撃され，積んでいた亀甲が盗まれ，1名が死亡した（2・418）。

1848年　内戦があり，800人が死亡した（2・435）。

1849年　オヴァラウ島で座礁したアメリカ船トム・ピッカリング号を原住民が略奪しようとしたが，到着した外国船が略奪者を撃退した（5・351）。

1850年　座礁したロンドンの船レディー・ホーデン号を原住民が略奪した（7・369）。

1851年　アメリカのパイロット号はある部族の協力を得てナマコを採取していた。アメリカ人に協力した部族を敵対的な部族が襲撃し皆殺しにした。原住民はパイロット号も襲おうとしたが，大砲で反撃され，多くの原住民が死亡した（2・458–461）。ヴィティレヴ島の原住民首長がアメリカ人を殺した。寄港したアメリカ軍艦で裁判が行われ，確かな証言があったので，死刑が宣告され処刑された（7・474）。

1855年　ヴィティレヴ島のレワの宣教師ムーアの家が放火された（2・467）。

1856年　原住民の残虐行為や船への略奪行為に対して賠償させるため，アメリカ軍艦ジョン・アダムズ号が来航した。野蛮人の頑強で手に負えない性格には厳しい手段が必要である。ジョン・アダムズ号はフィジー諸島を巡航中，ポリネシア[4]の人食い人種と5回交戦し，5つの大きな町を焼き払った。フィジー王のザコムバウと条約を結んだ（2・471–472）。フィジー人は依然として人食い人種である（6・371）。

1858年　恐ろしい人食い人種のワヤ島のロマティ地区の住民が船を襲い，乗組員を殺害して食べた。報復のため，アメリカ軍艦の兵たちが町を攻撃して150の小屋を焼き払った。遠征から帰る途中で300人の戦士に襲撃されたが，反撃して50人の原住民を殺した（2・482–483）。

ニューカレドニア

1843年　ロイヤルティ諸島で3隻のオーストラリアの船が襲撃された。スター号の乗組員は残忍にも殺害され，船は岸に引き揚げられて焼かれたが，積んでいた火薬の爆発で30人の野蛮人が死亡した。マーサ号の船員も捕らえられて木に縛りつけられ，彼らの内臓は抉り出され焼かれた。それから死体も焼かれてむさぼり食われた。人食い人種は，ミックマック号の乗組員にも同じような恐ろしいことを行った。これらの島々を訪れる時には最大の用心をすることが必要である（4・85）。

1844年　パインズ諸島（イル・デ・パン）の近くのマンゲエ島で船が原住民に襲撃され，多くの者が死亡した。この島では以前にも捕鯨船が襲撃され乗組員全員が殺された（3・500）。

1846年　1841年にシドニーのマーサ号がロイヤルティ諸島に寄港した際，誤ってボートのオールを首長の頭にぶつけてしまった。意図的に行われたと思った原住民は襲いかかってすべての乗組員を殺害した。人食い人種なので，野蛮人は犠牲者の遺体を料理した。パインズ諸島では1842年にも白檀交易船スター号が野蛮人に襲われ，20人余りの船員が死亡

した。何人かの遺体は料理された。船は略奪され焼かれた。船長が島の王を侮辱したのが，襲撃の原因のようだ。さらに，白檀交易船のブリガンド号とシスターズ号も襲撃され，多くの死者が出た。シスターズ号の場合，野蛮人は取り引きのもつれから乗組員全員を殺害し，何人かの遺体を料理し，残りは海に捨てた。略奪品のなかの火薬が爆発して原住民に多くの死傷者を出した。彼らは火薬の爆発は白人の魔術と考え，復讐を誓った。その後，ノーフォーク島からの脱走囚人と思われる7人の白人の乗ったボートが辿り着いたが，原住民は復讐のためにボートを襲撃し5人を殺害した（4・161-163）。

1848年　イギリス船ヴァンガード号の乗組員が原住民に殺害された（5・60）。

1850年　原住民が寄港したマリー号を襲撃し，乗組員を殺害した。原住民は遺体を岸に運び食べた。ロツマ島民の乗組員だけが死を免れた。彼は眼病を煩いほとんど目が見えない状態だったので，原住民は食べなかったのである（5・61-62）。

1854年　クック船長はニューカレドニア人を誠実で良好な性格と誉めたが，フランスのダントゥルカストーの探検隊の歴史家は，クックが彼らの性格の良さを誉め過ぎていると考えている。フランス人達は彼らが食人に淫している確かな証拠を得たという（5・70）。

1857年　原住民は，白檀採取の作業のため滞在していた11人のフランス人と14～15人のハワイ人を襲撃し，全員を殺害した（5・73）。

1859年　ニューカレドニアには人食い人種が住んでいる（2・265）。

1866年　フランスの軍艦のボートに乗っていた船員が，原住民に殺され，料理されて食べられた。フランス人は野蛮人に復讐を決行し，あたりにいたすべての者を殺し，村々に火をつけた。焼死した者以外に150人以上が殺害された（5・75）。

ニューヘブリデス

1801年　エスピリツサント島に寄港した捕鯨船ウォーカー号のボートに，原住民は矢を放ち石を投げた。数日後，傷がもとで2人の船員が死亡した。船員達は理由のない残酷な攻撃に怒って報復し，多くの野蛮人を死に至らしめた。ウォーカー号は島の他の場所でも野蛮人の襲撃にあった（2・286-289）。

1840年　ロンドン伝道協会の宣教師のジョン・ウィリアムスとハリスは，1839年11月にエロマンガ島の野蛮人に殺された。食べられたのではと推測されている（2・276）。エロマンガ島の原住民は野蛮な民族で，他の島々の人々とはまったく違い，人種的にはアフリカの黒人（African negroes）に近い。彼らは野蛮で下劣な民族である（2・281）。イギリス軍艦がエロマンガ島に来航し，隣のタンナ島の首長の仲介でウィリアムスらの遺骨を収容した。もう1人の西洋人の遺骨も届けられた。原住民はウィリアムスらの上陸に先立つ数カ月前に殺された者の遺骨だと言った（2・284）。

1846年　原住民がイギリスの捕鯨船ケイプ・パケット号を襲撃し，4人以外の船員を皆殺しにした。死体は岸に運ばれ食べられた。船は略奪され焼かれた（5・110）。

1855年　布教のためエファテ島に赴いた2人のクック諸島のラロトンガ島出身の島民伝道師と妻達は，島に着いてわずか19日後に，恐ろしい食人の宴会の食料とするために殺さ

れた。なぜこんな残酷な行為が行われたのかは不明である（2・258）。

1859年　キリスト教化されていないポリネシアの島々でしばしば起こる大規模な虐殺の情報がマレクラ島から届いた。シドニーの船メイド号の船長とほとんどの乗組員が原住民によって冷酷にも殺害された（4・115）。

1861年　宣教師ウィリアムスらの殺害は，以前来島して多くの人々を殺し畑を荒らした白檀採取の一行が戻って来たと誤解されて生じたのだと言う（4・495–497）。

1872年　宣教師ゴードンがエロマンガ島の原住民に殺された（7・336）。

1876年　エスピリツサント島の女性は性格も服装もひどく醜い。だから男達はよそ者に嫉妬しない（5・86）。

ソロモン諸島

1803年　サンタクルス諸島の原住民は野蛮で狡猾で信頼出来ないから，彼らに発砲せざるを得ない（7・233）。

1829年　イギリスの捕鯨船アルフレッド号の5人の乗組員が原住民に殺害された。原住民は捕鯨船ジョン・ブル号の乗組員も毒殺しようとした（6・459）。

1830年　オントン・ジャヴァ島の近くの島の住民はまったく裸で，亀甲の鼻飾りによって顔つきは一層野蛮人に見えた（3・253）。

1837年　オントン・ジャヴァ島で，アメリカの捕鯨船ハーモニー号の乗組員が原住民に殺害された（5・342）。

1842年　イギリスの捕鯨船オフレー号の乗組員16人がモノ島で殺害された。ナイフが盗まれたので，船長が原住民の首長を人質に取ったことが原因という（4・626）。

1860年　サンタイザベル島で，薪を入手するため岸に向かった捕鯨船ヘンリエッタ号のボートが原住民に襲撃され，逃げた1人を除く全員が死亡した。原住民はさらにヘンリエッタ号も襲撃し，船長の息子をさらった（6・388–389）。

1861年　アメリカの捕鯨船スーペリアー号はモノ島で原住民に襲撃され，26人の乗組員が死亡した。6人は捕虜となったが，後に訪れた船が救出した（4・627–634）。

ニューギニアとその周辺

1831年　アメリカのアンタークティック号の乗組員がブカ島の近くの島でナマコの作業中，大柄な黒人（negro）で野蛮な原住民に襲撃され，13人の乗組員が死亡。人食い人種の原住民は死体を食べ，頭蓋骨を首長の家の戸に吊した（7・239–252）。

1846年　ウッドラーク島の近くのローリン島のリーフでイギリスの捕鯨船が座礁し，乗組員は筏を作って岸に着く。乗組員は難破船を材料にして9カ月かかって船を作る。この間，原住民とは友好的な関係を維持し，食料の供給を受けた。しかし船が出港する直前，原住民は船長と6人の船員を殺害した。船員の1人が犯した何かの違反に対する報復と思われる。生き残った者達は26マイル離れたウッドラーク島に渡り，ここで親切に迎えられた。その後，ローリン島の原住民が何人か来て，島で起こったことを伝えると，原住民はただちに襲撃して，1人を除く全員を殺害した（4・8–9）。

1876年　以下はすべてモレスビー船長の航海記の紹介の記事。ニューギニアの原住民は凶暴と考えられている（5・96）。ニューギニア島の南東のテステ島には，食人種だが，それ以外には攻撃的ではない民族が住む（5・98）。ニューギニア島北岸のケープ・ネルソン付近の原住民はまったく裸で，嫌悪感を催す顔つきで，肌の色は黒く，髪は長く醜い巻き毛である（5・102）。

Ⅳ　文明的なポリネシア人と野蛮なメラネシア人

ここでポリネシアとメラネシアに関する新聞記事の内容を検討することにしよう。

最初に肯定的な内容の記事について見ていこう。まず，ポリネシアに関する記事に，18世紀のヨーロッパで盛んに論じられた「高貴な野蛮人」や「楽園」のイメージはほとんど現れない。圧倒的に多いのは，キリスト教の布教で文明化が進んでいるという内容の記事である。このことは，特にソサエティ諸島では繰り返し述べられているが，ポリネシアの広い地域にわたって見ることができる。これに対してメラネシアの肯定的な内容の記事は非常に少ない（このことだけからも，メラネシアについては否定的なイメージが強いということが予測される）。そして，メラネシアでキリスト教の進展について述べられているのはフィジーとニューカレドニアのリフ島だけである。また，メラネシアでは肯定的な内容の記事は1850年代以降にしか現れない。

次に否定的な内容の記事を見ると，来島した西洋人と島の住民との衝突により死傷者が発生したという事件の報道が多い。これはポリネシアとメラネシアの双方に共通して見られることだから一応括弧に括って，それ以外の記事を見ると，非常に明確な傾向を見いだすことができる。それは食人に関する記事である。ポリネシアではマルケサス諸島について集中的に食人の報告がなされている。マルケサス以外のポリネシア地域でも食人という言葉は出現するが，それは，キリスト教の影響で食人は終息した（ツアモツ，クック諸島）とか最近まで食人を行っていた（フトゥナ）というように過去形で語られるか，食人を行っている疑惑や噂がある（ツアモツ，クック諸島，ニウエ）というものであって，現在も食人を行っていると断定的に書かれている所はマルケサス以外にはない（マルケサスで食人が行われていた理由については後述する）。また，ソサエティ諸島・ハワイ・サモア・トンガ・ニュージーランドなどの主要な島々には食人の記事はない。これに対してメラネシアでは，フィジー・ニューカレドニア・ニューヘブリデス・ニューギニアと広範な地域で，食人が行われていると書かれている（ソロモン諸島に関する報告はない）。

アレンズは，多くの文化において食人という行為は，「極度に象徴的な儀式の場面を除いて，想像し得る限り最も瀆神的な行為」であり，「文明的な存在様態と野蛮な存在様態」を分ける境界確定の役割を果たすと述べている（アレンズ 1982: 187, 194)。また，クック諸島の首長が「昔だったらあなたがたを殺して食べただろうが，今はキリスト教徒だからあなたがたは安全だ」と言っていたように，キリスト教へ改宗することは食人を止めることと同義であった。オセアニアにおいても，食人は文明/野蛮，キリスト教徒/異教徒，ポリネシア/メラネシアとを分ける重要な指標となっている。

宣教師や島民伝道師が殺された事件は，ポリネシアからもメラネシアからも報告されている。ポリネシアでは，1824年のトンガの記事と1837年のウォリスのウヴェア島の記事がある。トンガの事件は，布教の歴史を記した記事のなかで述べられていて，実際に発生したのは1797年である。また，ウヴェアの事件も1835年に発生した。メラネシアでは1837年のフィジーの記事と，ニューヘブリデスの1840年（実際に発生したのは39年，以下同様)，55年（53年)，72年（61年）の記事が事件を報じている。ポリネシアにおける事件は早い時期に起こった。メラネシアについて報じられた事件はポリネシアより遅く，1830年代以降に発生し，しかも40年と55年の記事は，遺体は食べられた（らしい）という一層ショッキングな事実を述べている。

また，ポリネシアにおいてはキリスト教の布教により人々がきちんとした衣服を身につけるようになったという記事が散見される。腰に何かを纏っただけの「裸」という記事は，ポリネシアにも現れるが，「裸でも快活」（トンガ，ロトゥマ）とか「教会に行くのに裸」（クック諸島）といったように肯定的な文脈の中で述べられている。これに対し，ニウエ，ツヴァル，フトゥナといったポリネシア中央部の小さな島々とメラネシアでは，裸が「黒い肌[5]」や「野蛮人」といった言葉をも伴って否定的な文脈の中で示される傾向がある。

以上を通して浮かび上がって来る19世紀のアメリカにおけるオセアニアの人々に対する全体的なイメージは，「文明への道を歩みつつあるキリスト教徒の住むポリネシア人（食人の行われるマルケサス諸島を例外として)」と「(宣教師達をも殺害し食べてしまう）野蛮な食人種の住むメラネシア人」というものであり，ポリネシアとメラネシアはキリスト教的な文明と野蛮という対立的な構図の中に位置づけられていることが明らかである[6]。

以下で，こうした両地域の対照的な様相が生まれてくる歴史的背景を考察しよう。

ロンドン伝道協会の宣教師ジョン・ウィリアムスは，1838年の著書の中で，オセア

ニアの島々を東ポリネシア（現在のポリネシア）と西ポリネシア（現在のメラネシア）に分けて，以下のようにキリスト教の布教の状況を述べている。東部のマレー人に似たポリネシアのアジア人のほとんど全ての民族はキリスト教に改宗した。今や我々はポリネシアの黒人達（Polynesian negro）のもとに到達するために西へと向かう。しかし，これには多くの危険が伴うだろう（Howe 1984: 286–287）。

既に述べたように，オセアニアにおけるキリスト教の本格的な布教活動は1797年のタヒチから始まり，そこからポリネシアの全域へと広がって，1830年代にはポリネシアの主要な島々の人々はキリスト教に改宗した。そしてその後に，メラネシアへの布教が行われたのである。

1939年，ウィリアムスは自らメラネシアへの布教に出発したが，新聞記事で報告されているようにニューヘブリデスのエロマンガ島で島民の襲撃により死亡した。メラネシア地域での布教の開始は，早い所でも1830～40年代であった。

このように，メラネシアでの布教活動はポリネシアよりもかなり遅れて始まったのだが，さらに，メラネシアでの布教はポリネシアのように順調には進まなかった。

キャンベルはメラネシアで改宗が困難であった理由を3つ挙げている。第1に伝統的な宗教の問題。ポリネシアの宗教では神々の役割が明確で神々は組織化されていたが，メラネシアでは多くの精霊や死霊が組織化されずに存在した。このため，キリスト教の神の観念を伝達するのが，ポリネシアでは比較的容易だったのに対し，メラネシアでは困難だった。第2には言語の問題。ポリネシア各地の言語はオーストロネシア語族に属し，言語間の相違はわずかだった。メラネシアでは系統の異なる数多くの言語が存在し，小さな島のなかでいくつもの言語が話されていることすらあった。このため，ポリネシアでは宣教師が言語を修得し聖書を翻訳するのが容易であったのに，メラネシアでは非常に困難であった。第3に社会組織の問題。ポリネシアでは政治的に統一された社会の規模が大きく，王や首長は強大な権力や権威を持っていた。メラネシアでは政治的集団の規模が小さく，首長の権力も弱かった。ポリネシアでは王や首長の改宗によって集団全体が改宗するということが起こったが，メラネシアではそうしたことは起こらなかった（Campbell 1989: 117）。第3の点について，ニューヘブリデス諸島で布教した長老派の宣教師イングリスが以下のように述べている。

「東ポリネシアのマレー人の間では首長がキリスト教徒になると，部族に属するすべての者は首長の宗教を信仰しなければならないと考え，キリスト教徒となった。・・・しかしパプア人の間では，首長達はそのような力をもたない。民主制が支配している。それ故，宗教は部族というより個人的な事柄である。すべての人々は自

己の個人的な責任に基づいて行動する」(Howe 1984: 298 より再引用)。

このように，メラネシアでのキリスト教の布教はポリネシアに遅れて始まったうえに，改宗までにかなりの時間がかかった。こうして，19世紀のオセアニアでは，「キリスト教をすぐに受け入れたポリネシア」と「なかなか受け入れないメラネシア[7]」という対照的な状況が生じ，メラネシアでは食人が依然として行われているとされたのである。

ポリネシアではマルケサス諸島で食人が報告されていた。これは，谷ごとに共同体が割拠して常に対立し，全島にまたがる政治的統一がついに達成されなかったことと，布教の開始は早かった（タヒチと同じ1797年）にもかかわらず，進捗し始めたのは1850年代に入ってからのことで，「ポリネシアとしてはもっとも遅い教化活動」(石川 1979: 352–353）であったことと関連するのであろう。

以上のように，19世紀のオセアニアは，本格的にキリスト教の布教が開始された後，様々な困難に出会いながらも，ポリネシアからメラネシアへと次第に成果を挙げていった時代と見ることができる。このようなキリスト教的な見方は，アメリカ人のオセアニア観にも大きな影響を与えた。

シュトラウスは，1840年代の初めまでのアメリカにおけるオセアニア地域に関する情報源となった出版物を検討している。それによると，最初はクックなどの航海記が主たるものであったが，19世紀の最初の 1/3 の時期は特にニューイングランド地方(捕鯨船の母港があり，アメリカで太平洋地域との関係が最も密接であった地域である）の新聞を介して伝えられる情報が重要となったという。そして，1825年以降は，オセアニアの情報に関してはキリスト教の布教団体の出版物が圧倒的な影響を持つようになり，1830年までに「アメリカの読者達は宣教師の見解をいやでも聞かなければならないような状況だった」という（Strauss 1963: 156)。本稿で検討した新聞記事も，こうした状況を直接・間接に反映したものと見ることができるであろう[8]。

おわりに

19世紀のアメリカの新聞記事の検討から，ポリネシアとメラネシアはキリスト教に関して対照的な様相を呈すと考えられていたことを示した。このような両者を対照的なものとして捉える視角は，18世紀のクックの航海に起源を持ち，現在にまで持続するものだとトーマスは述べている（Thomas 1989; 1997)。クックと彼の同行者達は，ポリネシアの島々での言語の同質性に気づき，さらに太平洋の東と西で人々が異なる

ことを見いだした。例えば，第2次航海に参加したヨハン・ラインハルト・フォルスターは以下のように書く。

「我々は南海で主として2種類の人々を認めた。一方はより色白で長い手足の強壮ですばらしい体格をし，親切で寛大な性格を持つ人々である。他方は肌の色が黒く，ちぢれかかった髪で，よりほっそりして身長も低い体つきで，より活発かもしれないが，いささか信頼できない性格を持つ人々である」(Thomas 1997: 136 より再引用)。

前者はポリネシア人，後者はニューカレドニアとニューヘブリデスの人々を指している。

上記のように18世紀には漠然と東と西に区分されていたものを，1832年にフランスの航海者デュモン・デュルヴィユがポリネシア・メラネシア・ミクロネシアと明確に区分した[9]。彼は，ポリネシアが発達した芸術・組織だった政体と宗教で知られているのに対し，メラネシアはポリネシア・ミクロネシアよりも野蛮な状態にあり，きちんとした政治形態も法律も確立した宗教もない，あらゆる制度は依然として萌芽期にあり，人々の気質や知性も一般に劣る，と述べた（Thomas 1997: 144–145)。

19世紀には，デュルヴィユのような民族学的視点と本稿で示したキリスト教的な視点が併存し，引用した宣教師イングリスの言葉に見られるように，両者を結びつけて論じられることもあった。

20世紀のアメリカで広く読まれている雑誌の『ナショナル・ジオグラフィック』にもポリネシア・ミクロネシアはメラネシアとは異なる世界として提示されている，と述べるのはルッツとコリンズである。この雑誌に掲載された写真から第三世界がどのように表象されているかを考察した彼らは，ポリネシア・ミクロネシアの場合，男性はカヌーに乗っているところが示され，ロマンチィックな航海者のイメージが呈示されていると言う。そして女性は，ゴーギャンの絵の構図に似たけだるく横たわるポーズで示され，女性のセクシュアリティーと美が強調されている。さらに，髪に花をかざした女性のポートレートが並んでいる。労働している写真よりも男女が踊る写真が用いられる。これに対してメラネシア（特にパプアニューギニア）の場合，顔に彩色を施し鼻飾りをつけた男性のポートレイトが並び，男が化粧をする「異様さ」が強調される。さらに男性は弓矢を用いる狩猟者として，女性は網袋の中に豚や赤ん坊を入れて運び畑であくせく働く者として示される。メラネシアは，暴力・タブー・危険・冒険の地域，時間を超越した地域（今に残る石器時代）として示されている（Lutz and Collins 1993: 133–153)。

ルッツとコリンズは，雑誌は発行部数を維持するために，既に存在する文化的観念

に訴えなければならないと述べる（Lutz and Collins 1993: 133–134）。雑誌は読者の持つイメージに沿った記事・写真を載せ，読者はそれによって自分のイメージを再確認する。こうして，ポリネシアとメラネシアの対照的なイメージは持続する。

注

1）ソサエティ諸島の戦争の神で，平和時には収穫と豊饒の神でもあるオロを祀る宗教結社で，結社の人々は各地を回って歌や踊りをオロ神に捧げた。彼らは，結社のメンバーの男女の間で，また訪れた土地の人々との間で性的な関係を結び，子供ができると殺したという。
2）かつては，オセアニアの人々は「インディアン」と呼ばれた。
3）事件が「フィジーで起こった」というのは誤報で，実際にはミクロネシアのギルバート諸島で起こった（5・5–8）。
4）かつては，オセアニア全域が「ポリネシア」と呼ばれた。
5）イギリス人は古くから黒という色に対して「不快感以上の嫌悪感」を抱いていた。さらに奴隷制によって黒人蔑視が強まったという（マーシャル・ウィリアムズ 1989: 64, 341–342）。
6）本稿では省略したミクロネシアについてごく簡単に述べておくと，肯定的な内容の記事と否定的な内容の記事の件数を比較するとほぼ同数で，メラネシアのように肯定的内容の記事が極端に少ないということはない。キリスト教の進展に関する記事は少ないが，食人の慣習についての記事はない。このことから，ミクロネシアに関するイメージはメラネシアとは対極的で，ポリネシアに近いものと位置づけることが可能となろう。
7）メラネシアの中でも社会組織が「ポリネシア的」とされるフィジーとニューカレドニアではキリスト教への改宗が早かった。
8）ウォードの本に収められた新聞記事にも，キリスト教系の新聞から採られたものがある。
9）「メラネシア」という言葉が広く使用されるようになるのは19世紀の中頃からだという（Howe 1984: 287）。

文　献

アレンズ，W.
　1989『人喰いの神話——人類学とカニバリズム』折島正司訳，東京：岩波書店。
Campbell, I. C.
　1989 *A History of the Pacific Islands.* Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
Dodge, Ernest S.
　1965 *New England and the South Seas.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
Howe, K. R.
　1984 *Where the Waves Fall.* Honolulu: University of Hawaii Press.
石川栄吉
　1979『南太平洋——民族学的研究』東京：角川書店。
Lutz, Catherine A. and Jane L. Collins
　1993 *Reading National Geographic.* Chicago and London: The University of Chicago Press.
マーシャル，P. J.・G. ウィリアムズ
　1989『野蛮の博物誌——18世紀イギリスがみた世界』大久保桂子訳，東京：平凡社。
森田勝昭
　1994『鯨と捕鯨の文化史』名古屋：名古屋大学出版会。
Strauss, W. Patrick

1963 *Americans in Polynesia 1783–1842*. East Lansing: The Michigan State University Press.

Thomas, Nicholas

1989 The Force of Ethnology: Origins and Significance of the Melanesia/Polynesia Division. *Current Anthropology* 30, 27–34.

1997 Melanesians and Polynesians: Ethnic Typifications inside and outside Anthropology. In N. Thomas *In Oceania*, pp. 133–155. Durham and London: Duke University Press.

Ward, R. Gerald (ed.)

1967 *American Activities in the Central Pacific 1790–1870* 8vols. Ridgewood, N. J.: The Gregg Press.